

笹川スポーツ財団 スポーツアカデミー

2016年12月2日（金）

# 部活動の社会的意義と課題

西島 央 （首都大学東京）

## <1> 部活動のあり方をめぐる昨今の動向

表1 OECD TALIS調査結果			
1週間の総労働時間		課外活動指導にあてる時間	
参加国平均	日本	参加国平均	日本
38.3時間	53.9時間	2.1時間	7.7時間

- ・「部活問題対策プロジェクト」によるSNSを使った署名や、部活動に関する課題の発信
- ・朝日新聞で「中学校の部活動」5回連載（4月～5月）
- ・『月刊高校教育』9月号「特集 部活動はブラックか？」（学事出版）

## 「学校現場における業務の適正化に向けて」 （文科省 16年6月発表）

- ◆毎年度の調査を活用し、各中学校の休養日の設定状況を把握し改善を徹底
- ◆総合的な実態調査、スポーツ医科学等の観点からの練習時間や休養日等の調査研究
- ◆運動部活動に関する総合的なガイドラインの策定
- ◆中体連等の大会規定の見直し
- ◆部活動指導員（仮称）の制度化・配置促進等

※報告書本体では、複数顧問の配置を求めることも示されている

# 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」

(文科省 16年8月発表)

## 第2部 1. 各学校段階の教育課程の基本的な枠組みと、学校段階間の接続

### (3) 中学校 ③教育課程を軸とした中学校教育の改善・充実

#### ii) 将来にわたる持続可能性をふまえた部活動の在り方

- ◆ 中学校単独での部活動の運営体制から、複数の中学校を含む一定規模の地域単位で、その運営を支える体制を構築していくことが不可欠
- ◆ 生徒の「主体的・対話的で深い学び」を実現する視点が求められることを明確にする
- ◆ 生徒の学びと生涯にわたるキャリア形成の関係を意識した教育活動が展開されることが重要であり、短期的な成果のみを求めたり、特定の活動に偏ったりするものとならないよう、休養日や活動時間を適切に設定するなど、生徒のバランスのとれた生活や成長に配慮すること
- ◆ 部活動も含めた、(中略) 活動の実施に当たっては、教員の負担軽減の観点も考慮しつつ、地域や学校の実態に応じ、地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等、各種団体との連携など、(中略) 運営上の工夫を行うこと

部活動について、これらの議論は・・・

i . 運動部中心に

ii . 競技力や技能の向上を目的として

iii . 教員の負担軽減に焦点化して

iv . 中高生のスポーツや芸術活動を学校教育に従属させて

→しかし、部活動の役割はそれだけか？

中高生や私たちがスポーツや芸術活動をするのは、うまくなったり勝ったりするためだけか？

## <2> 中学生や教員の部活動に対する考え

図1 1週間あたり総参加時間別に見た活動日数に対する中学生の意見

■ 少ない方がいい ■ 満足している ■ 多い方がいい

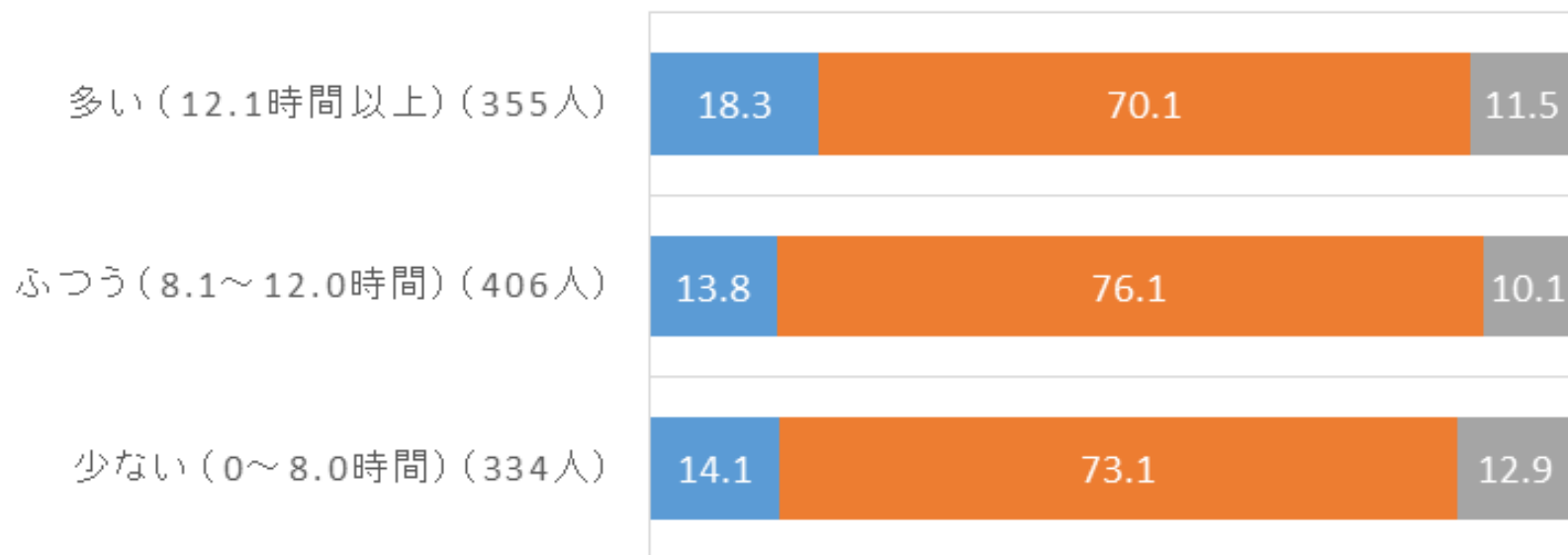
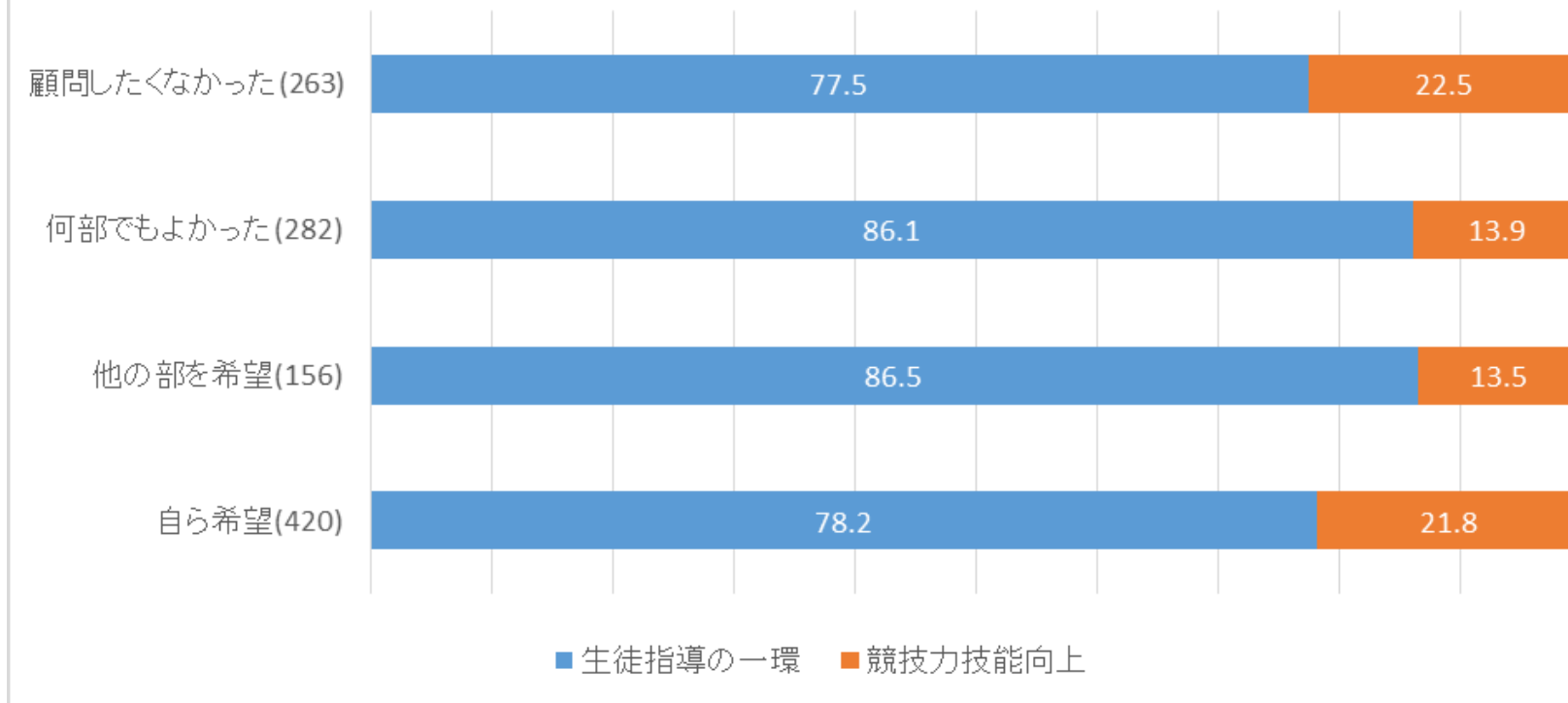


図2 顧問担当経緯別にみた部活動指導観  
「部活動は生徒指導の一環か競技力技能向上か」



## ＜3＞部活動の歴史的経緯

表2 学習指導要領上の部活動・クラブ活動の変遷

学習指導要領の改訂		課内活動	課外活動
1947(昭和22)年	小	「自由研究」	
	中	「自由研究」	
1951(昭和26)年	小	「教科以外の活動」	
	中	「特別教育活動」	
	高	「特別教育活動」	
1958(昭和33)年	小	「特別教育活動」	
中			
1960(昭和35)年	高		
1968(昭和43)年	小	「必修クラブ」	
1969(昭和44)年	中	「必修クラブ」	「選択クラブ」(部活動)
1970(昭和45)年	高		
1977(昭和52)年	小	「特別活動」(クラブ活動)	「選択クラブ」(部活動)
1978(昭和53)年	中		
1989(平成元)年	高		
	小	「クラブ活動」	
	中	(「クラブ活動」)⇔「部活動」	
		“部活代替制度”	
1998(平成10)年	小	「クラブ活動」	
1999(平成11)年	中	(廃止)	「部活動」
	高		
2008(平成20)年	小	「クラブ活動」	「部活動」
2009(平成21)年	中	(廃止)	
	高		教育課程との関連づけに留意

2008年版中学校指導要領  
総則第1章第4の2(13)より

生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること。(以下略)



89年版学習指導要領で認められた部活代替制度により、それまでなら放課後の部活動に参加することのなかった生徒たちも、教育課程内のクラブ活動を履修するために部活動に参加しなくてはならなくなりました。全生徒が部活動に参加するので、それまでなら自主的に関わっていた教員だけでよかった部活動指導により多くの教員が関わらなくなっていくていった。

98年版学習指導要領でクラブ活動が廃止されても、教員は部活動を手放さなかった。

→しかし、それだけで部活動は‘ブラック’になるだろうか？

1. 部活動の役割や目的の多様化、複数化
2. 練習・活動の量の増加、質の高度化
3. 各学校の教員数・生徒数と部活動設置数・各部の部員数とのバランスの崩壊

## <4> 部活動の社会的意義と課題

### (1) 中学生の部活動に対する多様な楽しみや期待と そこから読み取れる意義・役割

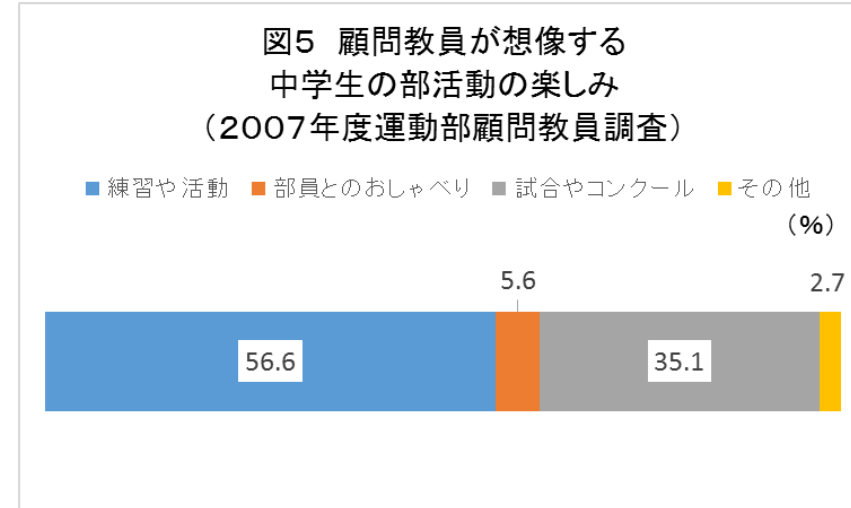
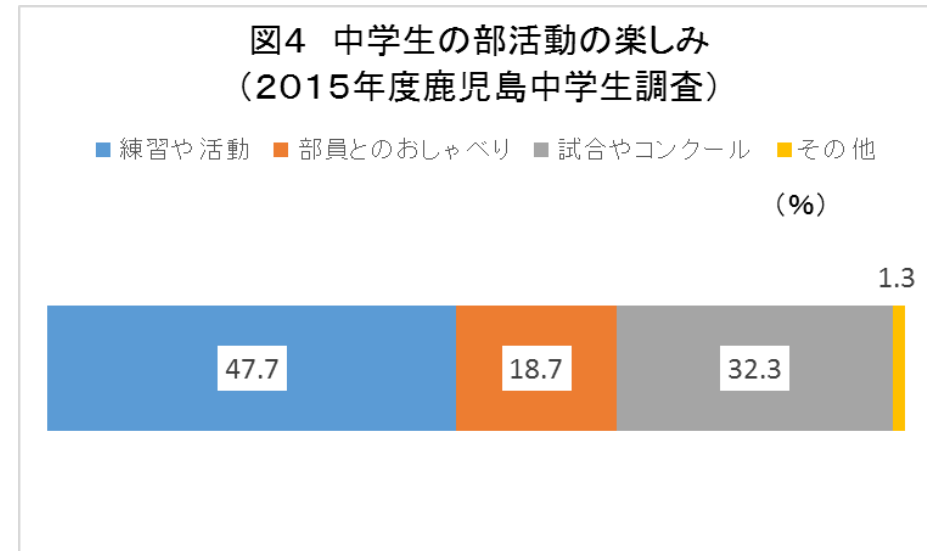
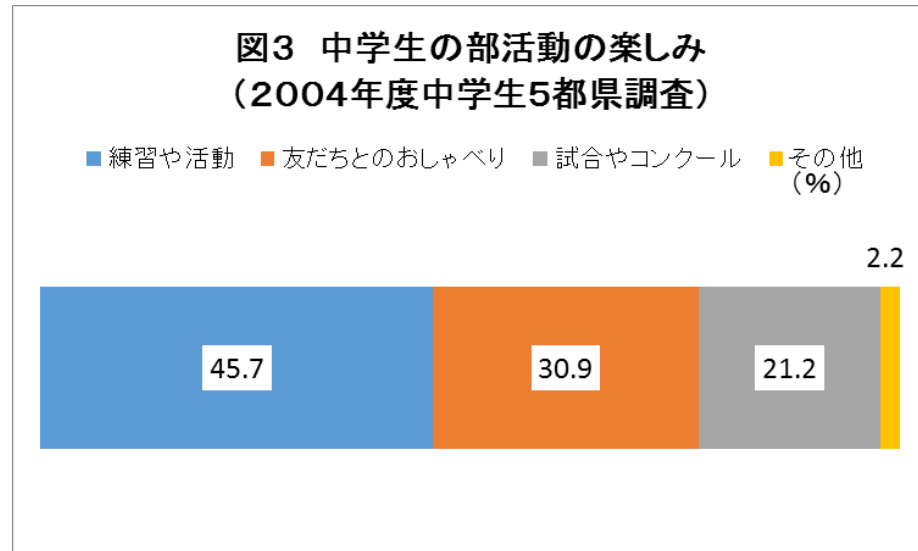
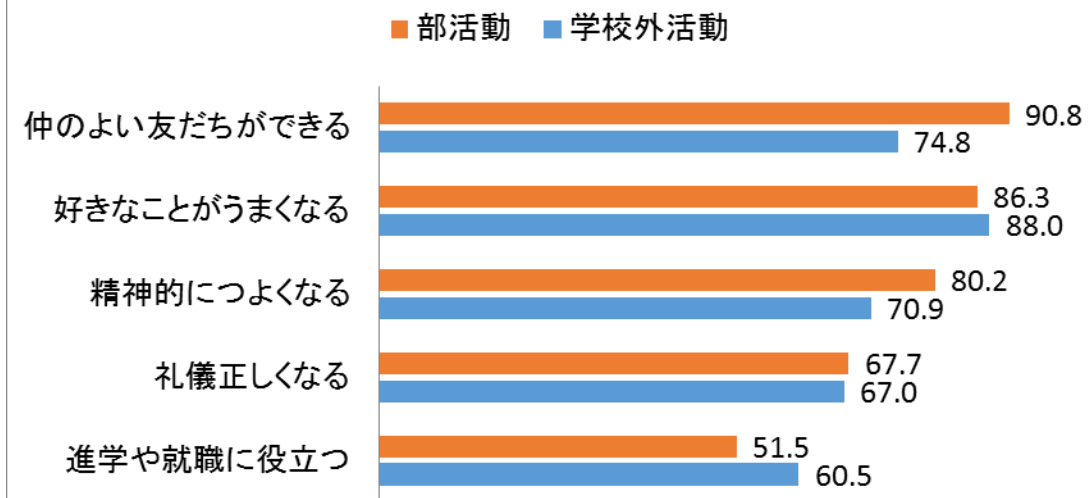


図6 部活動と学校外活動への期待  
(2004年度5都県中学生調査) (%)

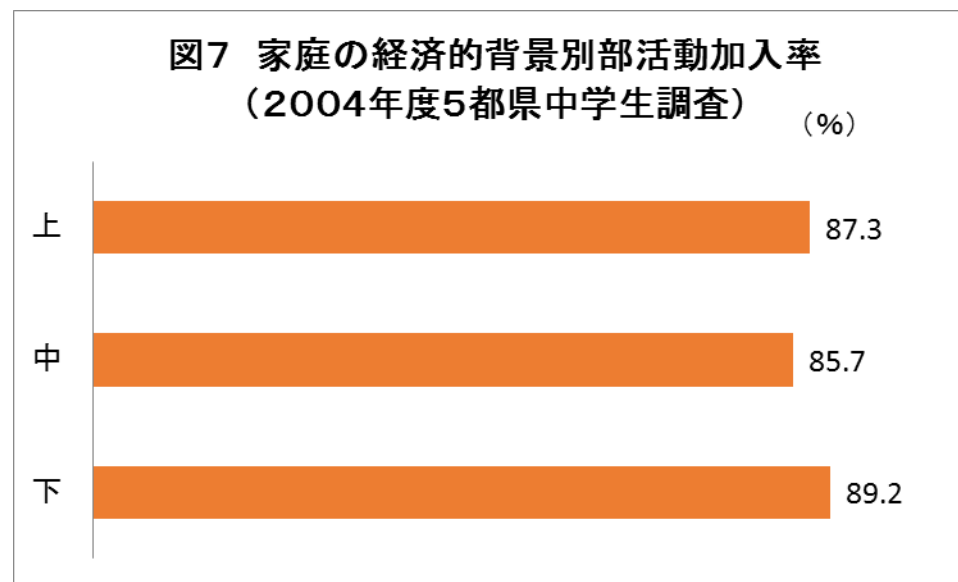
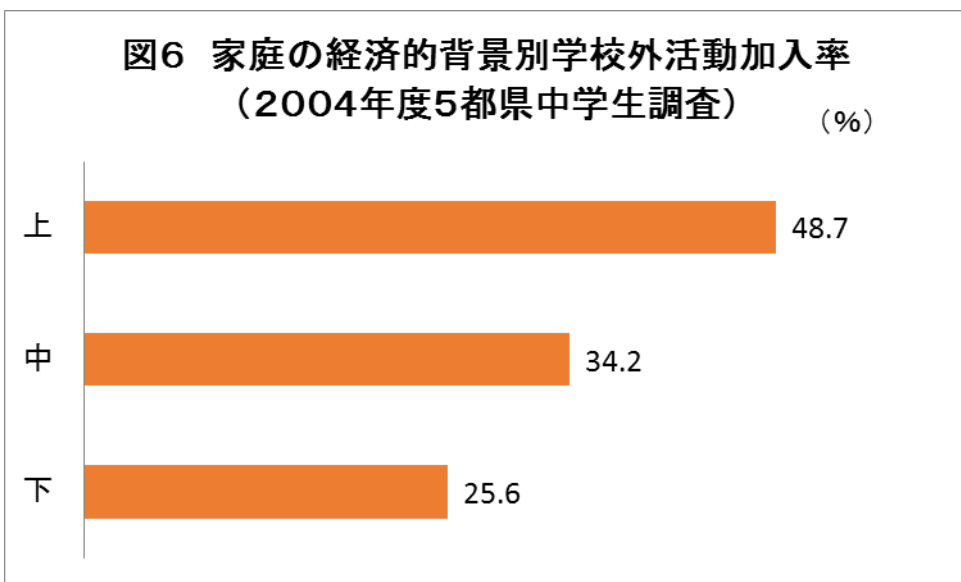


## (2) 社会的な観点からみた部活動の意義・役割

表3 平日の練習・活動日数(%)

1日	0.1
2日	1.1
3日	1.8
4日	22.7
5日	74.3
合計	100.0

(2015年度鹿児島中学生調査)



### (3) 社会的意義の整理

#### ①社会関係資本を蓄積する役割

- ・部活動を通して友だちをつくりたい
- ・一緒にスポーツや芸術をして友だちと楽しく過ごしたい

#### ②社会的包摂の役割

- ・放課後や週末の居場所になる
- ・家に帰っても空いた時間にすることがないが、ここで何かできる

#### ③文化的な格差を縮減する役割

- ・スポーツや芸術活動を通して、知識や経験を増やすことができる
- ・親世代の地位が子世代に引き継がれるのは、経済的な裕福さより、文化的な経験やそれを通して身につけるふるまい方や習慣による

#### ④なぜ、スポーツや芸術を通しての 社会関係資本や社会的包摂や格差是正が必要なのか？

1つの仮説として…

「余暇の時間が短くなると、家族や友人、近所の人々と過ごす時間のような、私たちの健康・幸福状態に真に差異を生じさせる活動の時間が少なくなる。何十年にも及ぶ研究において社会学者たちは、家族とともに過ごすことや、社会的活動に従事することは、寿命を延長し、生活の質を高めるもっとも確実な方法の一つであることを示唆する根拠を蓄積してきた。」

「スウェーデンの研究では、頻繁に余暇時間に文化的活動（例えば聖歌隊に入って歌うこと、音楽演奏会に参加すること、美術展に行くこと、映画や観劇に行くこと、スポーツ観戦をすること、など）に参加した人々は、たとえ初期の健康状態や教育水準の差を考慮しても、そのような活動にほとんど参加しない人々よりも有意に長く生きられることが明らかにされた。」

（イチロー・カワチ他（西信雄他監訳） 『不平等が健康を損なう』（訳書2004） 日本評論社）

## (4) 部活動の抱える課題

このように見てくると、例えば、「活動時間が長すぎるなら、短くすればよい」とか、「教員の負担が大きすぎるなら、部活動指導員を配置すればよい」とか、そういう単純に解決するような問題でないことがわかってくる。

例えば、①毎日練習していること、②経験のない顧問教員が指導すること、③外部指導者が指導することについて、生徒の立場に立って、「競技力や技能の向上」「友だちづくり」「放課後の居場所」「生涯学習のきっかけ」の四つの役割や目的ごとに評価してみよう。

	競技力や技能の向上	友だちづくり	放課後の居場所	生涯学習のきっかけ
①毎日練習していること	○	△	○	×
②経験のない顧問教員が指導すること	×	○/△	○	△
③外部指導者が指導すること	○	△/×	×	○/△

部活動のどの意義や役割を重視するかで、部活動のあり方は変わってくる。

どの意義や役割を重視するかは、それぞれの学校、地域社会によって、違っていいのではないだろうか。重視する意義や役割に応じて・・・

①どのような部活動を設置するか

②いくつくらいの部活動を設置するか

・・・生徒数、教員数、学校の施設・設備・備品、  
地域社会の社会教育状況とのバランス

③加入のしかたをどうするか

④教員の関わり方をどうするか

⑤外部指導者（部活動指導員）の関わり方をどうするか

⑥練習・活動日数や時間、活動場所をどうするか

⑦さまざまな目的や役割をどのように配慮して指導・運営していくか

・・・etc.



# <5> 社会におけるスポーツ・芸術活動の観点から

部活動のあり方を検討し直すことは大切だが、スポーツや芸術の裾野を広げる機会やその競技力や技能を高める場として学校に依存している状況や、学校段階を上がるごとに、その活動の場を作り直さなければいけない状況、つまりスポーツや芸術が学校に従属している状況は、スポーツや芸術の社会的意義・役割を考えたとき、また少子高齢化やグローバル化などで日本社会のありようが変わりつつある社会状況を考えたとき、スポーツや芸術活動の場のあり方から考え直すことも必要だろう。

A. 部活動は学校教育活動の一環に位置づけるが、技術指導は全て外部指導員に任せる。(技術指導外部化)
B. 部活動は学校教育活動の一環に位置づけるが、練習や活動場所は、全て学校外の施設を使用する。(学校外施設使用)
C. 部活動は学校教育活動から切り離して、社会教育・社会体育に移行するが、活動場所として学校の施設・設備を提供する。(社会移行場所学校)
D. 部活動は学校教育活動から切り離して、総合型地域スポーツクラブや民間団体などの社会教育・社会体育に全面移行する。(全面社会教育移行)

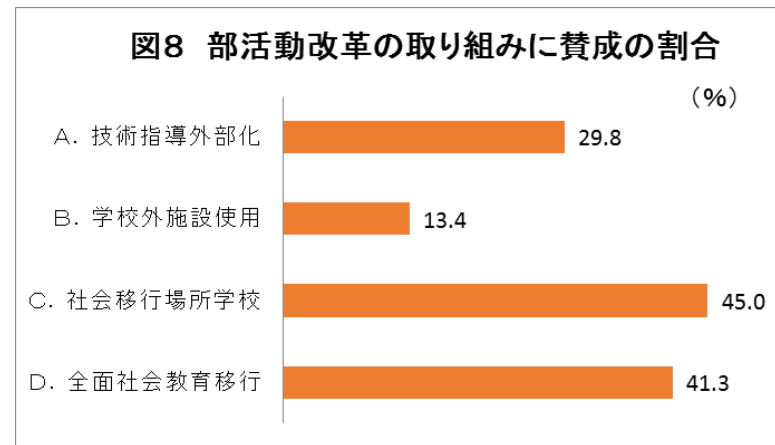


表5 人口規模別部活動改革に賛成の割合 (%)

	2万人以下	2万1人～5万人	5万1人～20万人	20万1人以上
技術指導外部化	22.3	28.7	33.6	31.5
社会移行場所学校	44.9	43.2	46.3	45.6
全面社会教育移行	40.6	36.9	41.8	45.2

(2014年度長崎県・宮崎県・鹿児島県の公立中学校教員対象調査)

スポーツや芸術活動のあり方は、地域社会によって違ってよいのだが・・・

スポーツや芸術活動に関わるさまざまなアクター・・・自治体、スポーツ競技団体・芸術団体、総合型地域スポーツクラブ等の社会教育関係団体、スポーツクラブや音楽教室等の民間企業・・・が

- ①スポーツや芸術の裾野の拡大、競技力や技能の向上にあたって部活動に依存してきていることをしっかり認識すること
- ②部活動が担っている意義や役割をどのように分担するかを考え、取り組むこと
- ③スポーツや芸術には社会的な役割があるから存在しているという側面をもっと評価し、社会的責任をどのように果たしていくかを考え、取り組むこと
- ④さまざまなアクターからなるそれぞれの地域社会にふさわしい、スポーツや芸術活動の場を共同でつくっていくこと

・・・etc.

調査概要		
i. 「2004年度5都県 中学生調査」	・調査対象地域	東京・新潟・静岡・島根・鹿児島.
	・調査対象学年	中学校2年生.
	・調査実施時期	2005年2月(2004年度).
	・サンプル数	公立中学校15校の1995名.
	・備考	2000年度に実施した中学生調査との比較可能な1062名を対象に分析する.
ii. 「2007年度中学校 運動部顧問教員調査」	・調査対象地域	東京・静岡・新潟.
	・調査対象者	柔道部、男子バスケットボール部、女子バレーボール部、軟式野球部、陸上部、水泳部の顧問教員.
	・調査実施時期	2007年7月.
	・サンプル数	公立中学校当該部の3分の1を系統抽出1853部. 回収数705票(回収率38%)
iii. 「2014年度長崎・宮崎・ 鹿児島公立中学校教員調査」	・調査対象地域	長崎・宮崎・鹿児島.
	・調査対象者	管理職および教諭.
	・調査実施時期	2014年12月.
	・サンプル数	3県の公立中学校543校. 学校調査票の回収数219校(回収率40%). 教員調査票数の回収数は1443票.
ii. 「2015年度鹿児島県 中学生調査」	・調査対象地域	鹿児島.
	・調査対象学年	中学校1～2年生.
	・調査実施時期	2015年11～12月.
	・サンプル数	公立中学校12校の1960名.